

施設より来たりし客の美知子さん美容師われをキヨちゃんと呼ぶ
中村清美

施設から来た美知子さんには何か物語、つまり個人的な事情があるのだろう。わざわざ一首にしたのは、「キヨちゃん」と呼ばれたのが、作者にとつてよほど意外だったからだろう。固有名詞を二つもちいて、印象鮮明な一首にしあげた。

新しい仕事もひと月慣れて来つ カプセルホテルも
上段に上る
西村 徹

「カプセルホテルも」の「も」が可笑しい。「新しき仕事も」の「も」とひびきあって、読者にユーモアの味わいをもたらしている。

木洩れ日にさくらんぼ揺れはつなつを啄む番を見ている番
久保富紀子

ヒヨドリだろうか、ムクドリもよくサクランボを食いに來る。じっさいは困る場面なのかもしれないが、「啄む番を見ている番」は、平和な時間を表現して、うまい。ただ、「はつなつを啄む」はいかが。ふつうに「さくらんぼを啄む番を見ている番」とした方がよかつたように思う。

カードゲーム兄としていた下の子が自分を初めて「おれ」と言いたり
亀崎恭子

私にもおぼえがあるが、子供がいつ、どう、新しい言葉をしやべるか、子供のポキヤプラーは子育ての大きな楽しみである。ここでは、兄を真似て「おれ」と言つたらしいことが、読者がしぜんに読めるよう工夫された

表現になつている。

指先はわれを離れぬ冷汁器に豆腐百丁並べ終ふれば
増田満美子

職場に取材した一連。名詞を多くして、あくまでも具体的に表現している点が見どころ。「冷汁器」がどういうものなのか知らないが、スーパード豆腐が温まらないよう工夫された容器のようだ。電気を使っているのだろう。「選歌ルーム」の横山未来子「専門用語など」でも、この作にふれているので、参照してほしい。

鴉五羽くらの暗きわが部屋に白鳥一羽の明かりを
つける
桑野智章

カラスとハクチョウで闇と明るさを表現したアイディア、そしてユーモアに感心した。じつにシンプルで、印象的である。

二百個の大玉キャベツ大桶に十個づつ漬けキムチ食
べまくる
鈴木恵子

結句の「キムチ食べまくる」に驚かされる。売り物ならばともかく、自宅用で二百個のキャベツのキムチ、ちよつと想像できない量である。「トレーラーに千個のカボチャと妻を積み霧に濡れつつ野を戻り来ぬ」という時田則雄の名歌を思い出した。

青空の青を授かり今日ひと日われの鏡の晴れわたり
おり
中西由起子

これを書いているのは梅雨の最中。この作の「授かり」に実感的な手ざわりが感じられる。青空をクローズアップするのには、鏡をもってきた感覚がいい。